

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Sept. 30th, 1957. No 307

關西大學學報

昭和32年9月 第307号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十三年九月三十日発行(毎月一回三十日発行)
通巻第三〇七号



容偉の會學三才

關西大學學報局

第四回

島根大学
関西大学

共同隠岐文化総合調査

考古学班 概報

末永雅雄

地理学班 草光教授(島大)、深田助手(島大)
企画班 今石教授(島大)、原教授(関大)

昭和三十三年七月八日(七月三十一日)

団長 末永教授(関大)

考古学班 末永教授(関大)、山本助教教授(島大)、

学生(島大)東森

- (関大)玄野、岡(院・二)、石野(院・二)、樋口(院・一)、北島(院・一)藤田(院・一)、勝部(院・一)、村津(三)藤田(三)、久保田(三)、久野(一)、田中(一)、伊藤(一)

歴史学班

- 魚澄教授(関大)、今石教授(島大)、鋤方教授(関大)、横田教授(関大)、友田助教教授(島大)、有坂助教教授(関大)、園田講師(関大)、内藤講師(島大)、津川講師(関大)

学生(関大)三名田(院・二)、二宮(院・二)、齊藤(四)、永野(三)、橋本(三)(島大)

国語学班

- 原田教授(島大)、吉永教授(関大)、広戸助教教授(島大)、小原助教教授(島大)、土部講師(関大)

社会民俗学班

- 井上教授(関大)、高橋教授(関大)山岡教授(島大)、原教授(関大)、吉田

助手(関大)

学生(関大)宮崎(院・一)、井上(四)

考古学班器材分担(関大) 学生責任(代表)石野博信、岡幸二郎
会計係 樋口昌徳、勝部明生
日記係 村津弘明

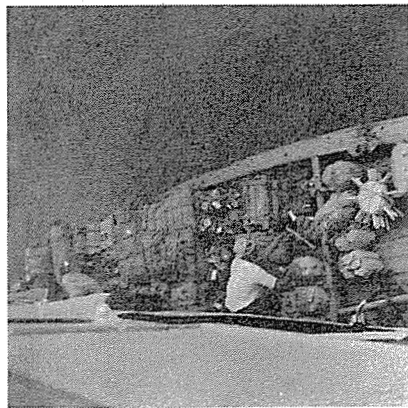
測量用具係 樋口昌徳、村津弘明、久保田福大
実測拓本用具係 勝部明生、田中久夫、伊藤勇伍
現地調査器材係 北島智、藤田茂夫
写真用具係 藤田治、久野邦雄
梱包、発送係 石野博信、岡幸二郎、全員

今年は現地調査完結の予定と、原田団長が島大文学部長任期満了と同時に学長代理となられるのと文部省に人文科学研究助成金を申請の關係で団長交代した。文部省助成金は五十万円、毎日新聞社援助金五万円、関西大学から援助金二十五万円をそれぞれ援助して頂いた。厚く感謝の意を表する。

昭和三十三年七月八日(月)曇午前八時大阪駅集合。学生 石野、樋口、藤田、北島、久保田、村津、久野、田中、伊藤、藤田
井上、原教授、伊藤氏連絡のため及び学生齊藤、永野君出発応援のため来られる。
昨日以来山陰線不通隠岐丸欠航の通知があつたが、一応渡島の見通しがついたので境港に集結する。九時

四十分出雲号発車。午後五時米子着。島根大学今石教授出迎えられ境港へ同行。打合せ事項終り今石氏松江へ帰られる。隠岐丸は明朝九時解纜の予定。萬田亜夫氏訪問。

七月九日(火)雨のち晴風あり。八時半乗船。島大山本助教教授松江からの連絡船で来られる。われわれは廿九年以来夜航海で隠岐に向かつたが、きょうは昼航海になつたので却つて見学には都合がよかつた。風や強く四百五十トンの船体はかなり動揺する。しかし大したことはなかつた。夕六時西郷着。一年ぶりに高梨旅館に入る。



隠岐丸が港につくと積荷が下ろされる～本土から

隠岐高校佐々木校長、田中教諭両氏、藤田一枝氏に調査計画を依頼かつ打合を終る。里見慶三氏、小室、高梨氏等新聞社の諸氏とも会う。

明日からの実施計画、会計の実行予算を確認する。
七月十日(水)曇 午前山本氏と関係先へ挨拶廻り。結城貞美君布施より来る。結城君は隠岐人となつた。午後一時三十分発バスで五箇村に向う。役場にて打合後現地検討。金阪亮・永海正木氏所有林の中にある横

穴概観。明日からの調査対象を定める。長谷川旅館に合宿、現地まで約二キロメートル。朝九時のバスで行き夕五時半のバスで帰ることにする。

金坂氏庭内の泉水を掘ったときに現われたと云う石皿、敲石等を見て附近を検索するに、黒耀石破片、土師器か弥生式土器の末期かと思われる小破片少量採集。但し石皿は縄文式土器関係である。

かつて金坂氏の採集された黒耀石と瑪瑙の石鏃各一



横穴墳墓～入口を石で閉塞する

個と貝製白玉一個計三点を寄贈される。これらの遺物は明日より調査の横穴のある丘陵頂で、金坂氏が採集せられたものであるから、初めわれわれは横穴調査を期待していたがこの石鏃・石皿・敲石・黒耀石破片などによつて、文化年代の著しく上昇することがわかる。

明日からの調査対象は、縄文式文化期から古墳時代末期までの時代区分をとることとなる。

七月十一日(木)曇 金坂氏裏山に数個の丘陵がつづくうち、金坂氏住宅に接近した(土地所有者金坂氏)丘陵を中心にある横穴の確認するに五ブロック二十七個がわかった。なお東西につづく丘陵にはかなりの

数があり、確認し難い埋もれた横穴もあることと思われる。第一ブロックのうち仮番号A・B・C・D・Eの清掃に着手。B横穴は入口を人頭大の自然石と更に大形の割石で閉鎖してあつたことがわかった。他の横穴も次第にその所在が明かになりつつあるが、数十年生の樹根が横穴附近に多くあつて、かなりその清掃作業は困難なものもある。

向山から横穴群の全景写真を撮影。今日午後来合せた真言の行者に観音経巻二十五普門品と般若心経を誦せしめて、この山の横穴に鎮まる諸霊を弔う。横穴から小蟹一匹這出して来る。横穴の霊蟹に化したか。

佐々木謙氏十数氏をつれて見学、金坂氏庭内で縄飛びをして遊ぶ児童数人を見ていると、それぞれ無心のうちに個性を表わしている。軽快に飛ぶもの、跳躍にリズムをもつもの、その姿勢、足のあげ方、児童たちは縄を飛ばすことと、飛ばせるために縄を上下左右に繰り返しているが、その動作に教えられるものがある。それとともに横穴の調査に努力する学生たちにもまたこの児童におけると同じものを感じた。



子供の縄飛び遊戯

歌詞はつぎの通り
「熊さん」熊さん／＼ 廻れ右 熊さん／＼ 両手を
ついて 熊さん／＼ 片足あげて 熊さん／＼ も
うよろし
「国賀」国賀よいとこ凄いとこ 波のしぶきは霧の
中に 続く断崖二千尺 崖の島々 とぶみさこ 波
はどんど とよせて散る

七月十二日(金)曇のち雨 定刻開始十一時頃から風雨激しく雷鳴加わり作業休止、長谷川旅館に帰り休養。島前の海士村に送った調査器材が廻送されて到着。山本氏は雨の中を谷涼一氏所有地内の横穴を視察。昨年来池をつくるために築堤工事によつて知られたもので、現在三個の横穴がわかるが調査しうるのは一個だけと云う。夕刻山本氏・八幡静男氏と谷涼一氏方へ行き調査打合せをする。夜になると西風が強くなり風となる。五箇村は隠岐の北端、日本海の荒い風を直接受ける。ときには怒濤の飛沫が雨のように家々の軒を打つことがあると云う。

七月十三日(土)曇 けさホトトギスの声を聞いた。山の端を低迷する薄雲の中から「ホンゾンカケタカ」と急い響きをもつた鳴声が連続して伝わる。暫らくすると近所の水若酢神社の森からもしきりに聞える。午前曇また雨と定りなく、泥濘の急坂の上下まことに困難を極める。大体各横穴の清掃終了遺物の残存殆どなし。附近の横穴を測量。今日一部の実測図作成。島大東森君到着、これで考古学班十四名となる。

夕刻八幡氏の案内で水若酢神社の祖神の古墳ではないか、と郷土研究者間に問題になる山の頂上を見る。古墳としての断案を与えることは非常に薄弱な様に思われるが、最後の極め手は発掘調査による外はない。夜岡部氏来る、八幡氏から附近の出土品で水若酢神

社に保管の資料の一部を借用調査をする。

七月十四日(日)晴曇 風ますます強く、丘陵上に登れば風速二〇メートル位と思われ、木々はみな葉裏を返えして躍る。到着以来静かな日はない。第一ブロックA-Eの横穴清掃大体終る。すべて盗掘されているが、構造は区間で天井低く玄室底面は隅丸形の方形。楕円形・半円形等に複雑なのが多い。

測量はトランシットと平板を進める。急傾斜地と樹木の障害が多いためこれもまた困難を極める。

山本氏と西方につづく丘陵の横穴、第四ブロックの造り付け石棺のある横穴を見に行く。東南面傾斜地の同じく急傾斜地を撰定し四個の横穴をつくつてある。その南端の横穴の奥壁に沿つて石棺がある。すでに盗掘され棺も破壊せられてはいるが、大体残つていゝ。玄室の天井は屋根形に削る。家屋の屋根を模したかどうかは明かでないが、九州地方の横穴に全く家屋の形式を表わしたものがあから、これもそのように見た方がよからう。

七月十五日(月)曇のち晴 横穴製図大体終る。測量は丘陵上部に展開日没まで努力。石棺ある横穴の製図も終る。山本氏別な古墳視察。横穴を通観すると大形なのは施工が丁寧で、小さいのは大体粗雑につくられる。それだけ内容遺物、葬法などにも差違があつた筈である。石棺造り付けの横穴が多数の横穴のうちでも最も丁寧に削り、天井を家屋形にし内容も広いことをもつてしても肯定される。尤もこの附近は西郷町の飯ノ山横穴などの硃曹土質と異り岩盤に近い硬さのものであるから、作業の困難なこともわかるが、それにしてもかような差異のあることに注意を要する。

七月十六日(火)晴曇 風強く測量は困難である。三班に分けて測量、向谷川の横穴の池になるために破

壊せられたものの調査、水若酢神社に保管の郷土研究会の資料(蒐集者藤田二郎、八幡昭三氏)、岡部丈夫氏資料、水若酢神社前、旭館映画劇場裏の古瓦出土地(犬町廃寺跡)の測量等、古瓦は八弁の蓮華文、唐草は退化甚し。岡部氏蒐集の丸瓦はその作行きは奈良の諸大寺の瓦にも劣らぬものであり、奈良時代にかなり大規模の堂宇があつたと思われる。昭和十年五月礎石を検出、長さ一メートル五十七センチ、幅九十センチ、中央に八〇センチ位深さ一センチの円形凹みがあり、割つて他へ運んだと云う。土地所有者増田芳男氏、岡部氏などその事実を語られた。

岡部氏蒐集品中に中村上元屋ヒエダ古墳出土の滑石碧玉の勾玉各一、碧玉の管玉一計三個あり、碧玉の勾玉と管玉は連貫して使用したために勾玉の穿孔部、管玉の両端が著しく磨損していることがよくわかる。滑石の方には磨損がない。

七月十七日(水)晴 三班にして横穴の実測修正と苗代田東方丘陵にある二つの古墳のうちの北のもの径十四メートル高さ一メートル位の円墳で竪穴式石室長さ三メートル弱、幅八〇センチ、深さ八〇センチ位、すでに盗掘せられてはいるがその略測図作成、ここで蠅を二匹とる。他の一班は廃寺跡の測量を継続する。

午後三時北方発のバスで全員西郷へ引上げ明日より調査の西西にある斎京谷古墳(日広)の発掘準備、今夜は高梨旅館、明日より原田に宿営の予定

北方の調査は金坂亮氏宅地及び永海正木氏宅地裏山の、丘陵の横穴の清掃と検出測図を主としたが、主な作業は金坂氏裏山の横穴調査であつた。その横穴の中には落磐危険あるものもあり、私にはこの四年間の調査のうち最も心労を要し、今日これを終つてほつとした。

七月十八日(木)雨のち晴 昨夜より再び豪雨襲来。今日の調査も案じられたが、午前九時半雨中を高梨より原田の宿舎へ移動。午後測量。

一方藤田一枝氏蒐集品の写真撮影。昨年より資料増加し、殊に貝塚と見られる遺物の一群(白髪貝塚と仮



斎京谷古墳の調査

称)がある。沈線文と縄文の小破片と無文の土器片若干、カキ、ハマグリなどの貝殻がある。

藤田氏によつて隠岐の古代遺跡がぞくぞく検出される。この資料は将来重要な研究上の基礎をなすことである。現在のわれわれもまた多大な寄与を受けている。

七月十九日(金)雨曇 主力は下西の斎京谷古墳の調査先ず測量を進める。明日発掘着手準備として古墳の慰霊祭を玉若酢神社の億岐氏齋主で執行。

藤田氏蒐集品の撮影、昨日撮影の分は大体成績がよかつた。種々の未知のものが出る。

七月廿日(土)雨曇 古墳調査は礫床に似た状態の部分に至る。但し雨の為進行芳しからず。午後闘牛見物の為作業休止。藤田氏蒐集品の撮影は夕方終る。

海士村役場田村氏より電話連絡あり山岡氏焼火山・草光氏弥田氏等役場で調査。山本氏連絡のため高梨旅館へ来られる。

萬田茂氏来訪黒木における社会民俗学班・歴史学班・国語学班などの行動を聞く。

七月二十一日(日)曇のち晴 久しぶりに陽光を仰ぐ。昨日までは写真機なども湿り、特に皮革製品はすべてジメジメする。単なる湿気のみではなく、汐風によるものと思われる。藤田氏資料撮影完了。齋京谷古墳は円墳二基が丘陵南北線上に並ぶ。連日の雨のため進捗せず、今日ようやく測量を終り発掘調査本格的になる。鉄器らしきものがあるが内部構造や遺物はまだ確認出来ず、しかし古墳の外形は近畿地方の円墳の中間程度である。

午後高梨武彦氏、野津利政氏、同玲子さん見学に来られる。野津氏とは昨年の加茂調査の懐古談でひとしきりにぎやかになる。夕方入港の隠岐丸で岡耕二郎君到着。すぐ原田の学生宿舎へ向う。大阪を出発して二週間を経過し予定の半を超えた。考古学班員は総員十五名健康である。

七月二十二日(月)晴のち雨 第一号(南)古墳は中央に直刀一口、東西にやや隔てて磔を敷いた部分がある。西の方は長さ一・九五メートル、幅〇・七二一八〇メートル磔は細かい。東の方は明日その実体がわかる筈。第二号(北)古墳は午後より発掘着手。今夕より学生は下西公民館に合宿。

七月二十三日(火)雨のち晴 齋京谷南古墳の東磔の北端で鉄器少量(斧その他)を検出。北古墳は土師器少量検出表土わずかにして粘土質の地山に達し遺構遺物を見ない。植林等のため封土上部が削平されたものとも考えられるが、現在はそれを確認する資料は

ない。ただ墳丘上の平坦部が広い。

午後玉若神社の駅鈴・隠岐倉印・国府原附近出土の石器類の写真撮影。夕方毎日新聞小室記者の軽自動車にのせてもらって帰る。昨日は車の反動がひどくこたえたが、きょうはなれて反動を軽く抜けるようになった。若いとき乗馬で古墳を見て歩いたことを思い出した。亥野疆君夕方到着考古学班十六名
七月二十四日(水)晴 齋京谷南古墳は棺の下に磔床をつくったことがわかる。この上に死者を横たえたものと見られ、周囲に板を立てて磔床上に組合せの箱式木棺にしたのではないかと思われる。加茂船島古墳での板状折離の石を使用した例と手法的には、共通するようでもある。

夕刻魚澄教授・藺田講師・島大山岡教授・深田助手到着、高梨旅館は賑やかになる。
隠岐高校女生徒(郷土研究班)この二三日応援。鈴木悦子、若松幸代、秋庭初枝、佐々木恵美子、竹内和子、横田法子さんの六名。また下西公民館で合宿のため炊事を担当されたのは常角寿美子、常角慶子、池田八子、宮西みさ子さんの四名である。

七月二十五日(木)晴曇 朝布施より結城貞美君が布施小学校裏の池の中から拾得の磨製石斧三個持参。縄文系の優秀なもの、一個双部欠この分自然石利用? 齋京谷古墳調査終る。午後山本助教引率で学生達は加茂に行く。昨年加茂船島調査の際加茂では非常に好意をもって協力せられたので、大阪出発のときから学生たちは再び加茂を訪れたい希望があつた上に、昨日野津利政氏が齋京谷古墳現地に慰問をかねて来て頂いたので、きょう午後一年ぶりの旧交をあためることとなつた。野津氏はじめ加茂の諸氏に厚く感謝する。永く忘れ難いことである。

齋京谷古墳の調査は二基の円墳が丘陵上にあつて南線上に接近して並ぶ。南古墳はかんたんな磔床が二つ東西に別れており、その中間に銚を南にした直刀一口、東の磔床上北端に鉄斧と刀子各一、封土上で須臾器の研片等の遺物があつた外、埋葬方法の詳しいことはわからず、二個の磔床の配置も統一がない。封土上東北部の塊石十数個は近世の墳墓と思われるが確証なし。北古墳は土師器破片のみで、遺構はわからなかつた。封土上部の平坦部が広きすぎるのは植林のために早く、その部分が削り取られたのであるうか。大体南古墳と同じような構造であつたとすれば、かんたんに取り去られる公算が多い。

今朝大阪から壺井教授・有坂助教教授到着。同じ船で吉永教授外三名島前の別府から、また井上・高橋・鎗方・横田教授外十名、島大山岡・草光・広戸・小原教授外二名、別府より海路都万へ上陸、バスで到着。これで廿五日予定の各班西郷集結終る。

午後一時半から西郷中学校で調査団の研究発表会及び座談会を開催。司会西郷町教育委員会高梨武彦氏、隠岐高校田中豊治氏、開会挨拶末永、考古学班末永、歴史学班魚澄、国語学班吉永、社会学班山岡、地理学班草光、閉会挨拶壺井の諸氏。

夜高梨旅館で今後の打合せをする。団長原案提出の十二項目について検討の上それぞれ予定及び決定。

七月二十六日(金)晴のち雨 齋京谷古墳調査のため下西公民館合宿所撤収、高梨旅館へ引上げ午後休養。歴史班は釜の佐々木氏の文献、国語班は都万の高田明神で隠岐百首の調査。社会班は加茂へ方言の採訪に出発。今夜隠岐丸欠航。

七月二十七日(土)雨 朝六時西郷出帆。豪雨の中に高梨旅館引上げ乗船の状態はあたかも出陣のよう

ある。魚澄、園田両氏も乗船。壺井教授、加茂の野津玲子さん、古墳調査を手伝っていたいた隠岐高校の生徒さん、高梨旅館の人達が見送られる。雨に濡れた甲板から学生らは盛に帽子を振り波止場の皆さんに応える。八時頃菱港に到着雨が少し小降りになり連絡船に乗換、魚澄・園田氏と別れる。島大の深田女史も松江へ直行、われわれは村役場の中山氏に迎えられて三輪車で田中旅館に着く。西郷の高梨旅館ではみつちやんはじめ女中さんたちが、親切に学生の世話をしてくれてよかつたが、人の出入が多く雰囲気になんとなく港の町の騒がしさのあつたに反し、こちらは全くの田舎であり、サイレンも鳴らなければ船のエンジンの音も聞へない。この宿はみつちやんの叔母さんの家だそうである。

午後雨が小やみになつたので郡山遺跡の測量と田邑二枝氏の蒐集資料の調査。田邑氏には郡山遺跡出土品が多い。縄文式土器・石器等は島前における先史文化研究の重要な寄与をなすものである。

郡山遺跡は菱浦の入江が南方へ奥深く侵入した海に臨み、中里と福井の間にある小台地であつて、早くに東大人類学教室出版の石器時代地名表に記録され、またここから発掘したと云う和鏡が海士村の村上助九郎氏の家にあり、昨年の十一月下旬、この遺跡上に古墳が二、三あつたうちの一基が発掘され山本氏が調査せられた。この古墳は仮名西古墳とすずに盗掘せられてあつたが、封土中に縄文式土器石器等の遺物が多数にあつた。これは古墳をつくるときに、附近の包含層の土を利用したためであり、そのことが遺物を現代に保存する結果ともなつた。

七月二十八日(日)晴曇 郡山遺跡の測量後試掘、土器石器等少量出土。田邑氏蒐集品は郡山遺跡出土品

を主としその他島前各地の遺跡に及ぶ。昨春秋発掘の西古墳出土の縄文式土器、石器等をはじめ別な古墳(同じ郡山遺跡中の)発掘の鉄製斧・須恵器破片なども蒐集せられてある。夜歴史班九名到着(横田、鎗方、有坂、津川諸氏の外学生)。

七月二十九日(月)晴のち雨 郡山遺跡発掘包含層は殆どなく浅黒い有機土層中に少量の縄文式土器・石鏃・石屑を検出、この発掘は拡大の必要がないの予定の行動は終つたから明日午前でこの調査を止め午後休養と撤収準備、都合よければ明夜乗船と決める。

昭和廿九年の夏隠岐調査第一回渡島以来、四ヶ年にわたる考古学班の行動は主として島大の山本助教の予備調査と企劃に基づいたものであつた。従来隠岐の考古学研究は極く小部分的な資料を知るに過ぎなかつたが、山本氏と現地における田中豊治氏、藤田一枝氏田邑二枝氏の努力で急角度の発展を示しつつある。

今次の調査によつて一応隠岐の考古学状況に対する大観は出来たが、精密な研究はむしろこれからである。われわれが隠岐の原始文化発展において、当然宍岐や対馬と同様に大陸文化との直接の連り、殊に大陸から日本への波及の、飛石的作用をもつていたのではないかと云う予測を裏切つて、すでに縄文式文化期に本土から隠岐への波及を主とする実状を、今次の調査で明かにし得たのは考古学班の大きな収穫であつた。

尤も将来の調査で大陸文化の直接影響を示すものがないとは断言し難い。隠岐がそうした地理環境に位置するのだから、むしろあるべきであるが、しかし現段階に立つて観察を与えた場合、それはたしかに宍岐や対馬の考古学状況とは甚しい相違を示していることは事実である。われわれが文部省の研究助成申請のために提出した課題を「孤島文化の変遷と本土との関係」

としたことに對して、考古学班ではすでに目的への答案を得たと信するものである。最後にわれわれの研究活動に對して多大の便宜と好意を与えられた関係地域の諸氏に深厚なる謝意を捧げる。

大阪を出て二十二日を経過しその間雨のために疲労が特に多かつたから、班員があまり疲労を来たさないうちに切上げようと思つたから、最初の計画より二日早く調査を終了。田邑氏の資料調査は測図を主とし大体今日で終る。

七月卅日(火)晴のち雨 郡山遺跡の発掘調査は、包含層が古墳封土に盛り上げられたものと認められるから遺跡は広い範囲にわたるとすれば、どこかに部分な残存があると思われるが、この究明は別な機会に譲り、第四次隠岐調査における考古学班の現地調査を打切る。発掘地の復旧、必要地点の写真撮影、学生の体重検査等を行い午後は地元の挨拶廻りと後鳥羽上皇の火葬所視察。夜歴史学班と会食。十時菱港に出て乗船。今夜はじめて星空に北斗七星の輝くを見る。隠岐に到着以来廿三日殆どさえた空を見なかつた。やや風があつたが船は静かに本土に向かつた。横田・有坂氏等再び西郷へ。

四とせ海を渡り通ひし隠岐の島今日ひと目こそ名残りおしまむ
隠岐の島ゆまたおとづる日もあらむ松のみどりのとわに栄えよ

七月三十一日(水)晴 午前四時境港に入港。東森・石野・齋藤の三学生は上陸、その他松江へ。六時前松江到着。歴史学班鎗方・津川。社会民俗学班の井上・高橋の諸氏学生諸君とここで解散。一部の学生で見学のため数日残るものがあつた。私は山本氏と島根大

共同隠岐文化総合調査

三十二年度社会民族学A班報告

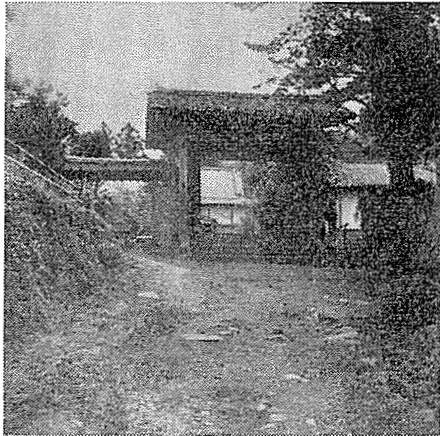
井 上 吉 次 郎

隠岐文化共同調査も第四年を迎え、そろそろ目鼻を附くべき段階にきた。今夏が勝負どころになる、というようなことは、仕事の性質が違うが、やはり一片づつと都合もよし、我々は、高橋盛孝教授と共に、「社会民族学A班」を組織し、勇躍、七月十六日夕、いつもの乗船港「境」に集結した。高橋、井上教授、吉田助手、宮崎、井上学生計五名である。「社民B班」は、社会調査のベテラン島大山岡教授が一人一班的軽騎隊で自由自在に島前島後を駆けめぐり得意の調査研究を重ねることになつて居り、われわれは、この友班と同時、随所、現地で出会い、話し合う手筈をきめた。

この夕、境には大阪から同行して来た「歴史学A班」の大部分の学生諸君あり、それに本夏新加入の経済学部鐫方博士あり、甚だ賑やかに「第二隠岐丸」へ繰り込む積りのところ、憎やこの頃の日和ぐせの夜の濃霧で欠航ときまり、ここに一泊、翌十七日朝九時、朝の「出し風」に送られて、運河みたいな港を出た。「隠岐丸」は、どんな計算でか、夏期夜航冬期昼航になつて居り、われわれは幾夏隠岐に往返しても全くの「深夜行」で、黒い潮切る船路と地蔵岬の灯台と空の星と漁火の光りと、それだけより眼に入らぬのであるから、この欠航で順序狂い朝風に吹かれて、三保関神社の森の朝陽に輝くのを波の上から遙拝出来たことは、「御蔭」であつた。「沖の御前」、「陸の御前」

の岩礁「神島」も波の中に見付た。「此島は神代に事代主命魚取玉、となりとそ外の魚もあれども鯛殊に多し」と「諸国周遊奇談」に書いている。三保関は前時代に隠岐島と内地とを結ぶ唯一といつてよいほどの海港だつた。少くとも、松江藩では、ここ一つを隠岐島への戸口にしていた。これは船の上からでも一目みて置かなくては、隠岐文化に合はず顔がない。

船は「浦郷」に着、直ぐ「端舟」に乗り移り、そのまま「別府」へ運ばれた。別府は、旧時代、島前の首都だつた。浦郷まで黒木農協理事長の万田さんが出迎えて来てくれた。この有力な地方人士の年来惜まぬ助力に我々は感謝の他ない。殊に今夏のように長く同氏の膝許に滞在して連日厄介をかけたことは、他の多くの御世話を頂いた人々と共に、感銘深いものであ



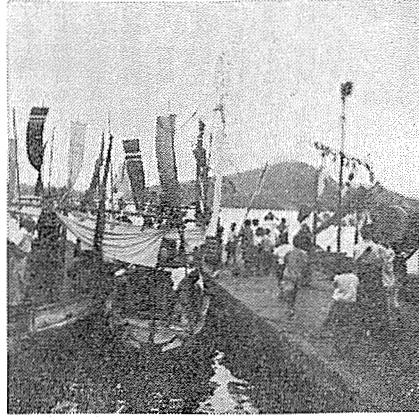
島前海部村上家

つた。

別府の宿に到着早々に前年からの馴染である旧黒木村役場保存の「文書」と取組んだ。吉田君等は歴史班の津川講師等と一緒に「大山脇」部落の実地調査に乗り出した。社会調査に於いて、一定地区を択び実体的に、或はシラミ潰しに調査考察することは、実証的科学的方法として、近來の流行だ。われわれは今夏に到つて一部此の方法を併用出来る段にきた。若い人達が、この仕事に昼夜兼行している間に、私と高橋さんは専ら鳥瞰的に飛んで歩いた。そのうち歴史班の横田教授も来著し、国語学吉永教授一行も集まり、これと鐫方氏等大勢でカンコに焼玉燃やしたみたいな小舟で、向いの「海士島」に渡つて、御鳥羽院の遺跡を尋ねたりした。その小舟で帰りに「国賀」の勝景を探りに回つて、梶緒絶え、危く漂流の憂目を見る瀬戸際まで行き、勝景どころでなく逃げ帰つた。この難所を回つた入江に、三度(みたべ)の孤村があるのであるが、とうとう海から姿だけを望見することも出来なんだ。B班山岡教授は陸路歩いて、この僻村に入り調査を遂げた、この前後に京大臼井教授一行は海からそこへ攻め込んだらしい、と聞いた。

別府の「海神社」の夏祭に際会し、「船渡御」をみる事が出来たのも海島文化をみに来ての大きな収穫だつたが、隠岐島前に残る唯一の「神楽」、幣頭石塚備前守一座の古曲を国語学班の手でテープ収録出来たことは更に大きな収穫だつた。我々はまた浦郷の船宿だつた伊勢屋に残る「船宿帳」を吉永教授の手で接写して貰つた。前年大山脇で写し取つたものほどの年代的幅を持たぬ断片ではあるが、「大山」と列ぶ島前の二大廻船々繋り港である「浦郷」の往年を語る生証文としての資料価値は高い、と思う。

浦郷を歩いて、「由良姫神社」に辿りついた。この海神の夏祭り、船渡御の神事も間近だとのことだった。姫神に詣でる鳥賊の群で一種異様の音をなし、「魚土に登る」話を面白く聞いた。西の島の東端の「宇賀」へもカンコで行つてみた。宇賀は海士の菱浦と目の前に向き合う港で、両島を菱、宇賀で繋いでいたんだ、という。また、ここから島後の津戸、蛸木にも一直線で通すが、島後との交通は主として海士島の「豊田」から津戸、蛸木に渡つた、とされる。



島前別府海神社夏祭

われわれも一週間以上の日子を別府の宿で過したあと、前代の族人みたいに、ただ櫓や帆の推進機の代りに、石油発動機を備えた小舟で、潮流と風とが逆になつて悪条件の中を別府から島後の都万(とま)に渡つた。七月二十五日、この日各班全員西郷港に落ち合い連絡の会合に召集されていたのである。大阪から魚澄教授、壺井文学部長も来会していた。

われわれは、前年から島後に主力を置いて仕事をやっているので、今夏は今まで「焼火」を除いて殆んど

手を付けていない島前で手一杯であるから、西郷滞在は短時間に止め、再び島前へ帰つて行くことを念とした。ただ二年越し興味を繋いで来ている山間の小部落の「釜」の実地調査を津川講師と共にやる必要を感じ、吉田、宮崎両君を派遣することにした。高橋さんと私は、「加茂」に残る文書をみに行つた。京都鴨の明神が自ら放つた矢の跡を尋ねて辿りついたといわれる加茂神社に由縁の「加茂の十六軒」が、いまに「流川」に沿つて列び住み、村の生活の中核をなしているのが面白い、と思つた。加茂からの帰途、バスを乗つて、下西の総社「玉若酢」を訪い、隠岐島切つての名家で、古くは、「国造」を姓とする億岐家の堂々たる隠岐造り建築をみせて貰つた。私は、島前の各所にある所謂島前式隠岐造りを幾つか採取した。島前に残る「島後式」のものもスケッチし得た。しかし、何といつても、隠岐造りの本歌は、この億岐家と釜の佐々木家だと思ふ。

今津の白鳥神社に奉納されてる「大和船」の模型と岸浜の厳嶋神社に掲げている船の絵馬をみたことも面白かつた。

西郷を歴史班に後れて発ち、その後を追つて、島前海士島の北分(きたぶ)についたのが、二十七日深更で、翌二十八、二十九、三十日を島前第一の大庄屋で現隠岐神社宮司である村尾家に残る記録の抄紙に費やし、三十一日払暎「境」着、まつしぐらに松江に渡り大橋際「皆美館」に駆け込み小憩、島根県好意の車で三保関に遊び、行きに船からの遙拝に止めた明神さんの御社に詣で、隠岐で年来交際を結んで来た「焼火」の松浦宮司の義兄に当る美保社の横山宮司から、御祭の話聞きスライドをみせて貰つた。航海安全の神様として、幾多の能力を具備すると信ぜられる此の神様

の祭礼もまた海上祭である。今年は方々で海に所縁の神々に親しみ、上代の海の民族生活を想つてみる折が多かつた。そして、海と船と、それに依存する人々の姿を、さまざま考えさせられた。(文学部、教授)

(六頁より)

学へ直行。その後原田教授のお宅に寄り朝食後、原田・今石・山本の三氏と松江における関係先へ挨拶廻りの後、再び島根大学に帰り若干の打合せ事項を終つて、十二時七分松江発出雲号で大阪に向う。鐔方・津川氏等亥野君はじめ学生数人同車。午後八時二分大阪駅着それぞれ我家へ。考古学班は二十四日の旅であつた。

附記 出発に際し健康診断を行い体力的に野外の調査に可能なるもののみ参加させた。途中風邪と疲労のため発熱軽微各一名あつた外、解散後首腸炎の症状を呈したのも一名あつたが、すぐ回復した。

考古学班体重測定

調査前 (貫)	調査後 (〃)	比
(32.7. 8日現在)	(32.7. 29日現在)	
M. S	17,500	0
H. I	18,400	(+) 500
S. F	16,700	(-) 400
S. K	15,500	(+) 300
F. K	15,200	0
O. F	14,200	(+) 400
U. I	14,200	(+) 400
M. H	13,600	(+) 400
H. T	13,500	(+) 700
M. K	13,200	(+) 200
K. K	13,100	(+) 500
H. M	12,300	(+) 100

(文学部、教授、文博)

学内報

臨時評議員会

学校法人関西大学寄附行為第十八条第三項による臨時評議員会を、九月十三日(金)午後四時より天六学舎において開催、昭和三十一年度学校法人関西大学収支補正予算承認に関する件(会館建設用地買収の件)、その他を審議し、これを議決した。

出席者(敬称略、五十音順)
 明石三郎 阿部基吉 池田信之助 今井康兼 岩佐清三郎 岩崎卯一 浦野健二郎 江里口春志 大小島真二 大島武夫 大森俊次 櫻本信雄 勝島芳松 桂忠雄 門上敏夫 神宅賀寿恵 河村宣介 小寺小市郎 河野稔 佐伯五郎 白川朋吉 竹沢喜代治 千巖克郎 寺西武 石清一 中務平吉 長柄金吾 西村治三郎 野間秀泉 春原源太郎 東浦栄一 久井忠雄 平井三朗 深川実 福島四郎 本多喜慶 堀正人 松原藤由 松村陸鴻 三島律夫 水谷揆一 宮崎平 村尾静明 村上精三 森川太郎 矢口孝次郎 保井剛一 矢野文雄 横田健一 吉富二郎

私大研究補助法

説明会開催

この度「私立大学の研究設備に対する国の補助に関する法律」(昭和三十三年三月三十日法律第十八号)並びに「私立大学研究設備審議会令」(昭和三十三年五月二日政令九十二号)の成立をみたので、文部省と私立

大学学術研究助成対策実行委員会とが共催で関西地区私立大学に対する同法の説明会が、九月六日(金)午後二時より本学千里山学舎円形教室で行われた。

出席校(順序不同)

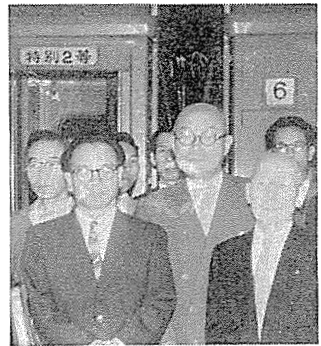
中京大学 南山大学 愛知学院大学 金城学院大学 名城大学 桐山女学院大学 花園大学 同志社大学 同志社女子大学 立命館大学 龍谷大学 大谷大学 仏教大学 京都薬科大学 京都女子大学 種智院大学 関西大学 五畿大学 大阪医科大学 大阪薬科大学 大阪経済大学 大阪工業大学 大阪歯科大学 大阪商業大学 関西医科大学 関西学院大学 武庫川学院女子大学 神戸女学院大学 神戸女子薬科大学 甲南大学 天理大学 高野山大学 松山商科大学 久留米大学



松原教授の挨拶

松原教授 帰学

昭和三十年度在外学術研究員として昨年十月二十九日出発した経済学部松原藤由教授は、イギリスでは主としてロンドン・スクールに学び、その他西欧、アメ



大阪駅にて帰朝した松原教授

海外の大学より

スウェーデン国会図書館と

図書交換

このほど、スウェーデン、ストックホルムにある国会図書館(Riksdagsbiblioteket)より、本学「法学論集」の連続寄贈方を申込んで来たので、本学ではこれに応ずると共に、爾後図書の交換を行うこととなった。



金融学会関西西部会

金融学会関西西部会は夏季休暇明け早々の九月七日午前十時より午後五時まで千里山大学ホールにおいて開催された。当日は台風十号の来襲が予報されるという

悪条件があつたにもかかわらず、高田保馬(大阪府立大)、一谷藤一郎(大阪大)、新庄博(神戸大)、中谷実(京都大)、石田興平(滋賀大)の各教授を始め、遠くは高松、彦根からの参加者もあつて出席者は三十名を超えた。

研究報告は、午前中京都大学の中谷実教授、午後は同志社大学の長尾義三教授の司会のもとに行われ、質疑応答も活発ですこぶる盛会であつた。報告論題ならびに報告者氏名は左記の通りである。

課税と貯蓄—N・カドラー「支出税」について 関西大学 上田 昭三

国民所得会計に対する一試論 神戸大学 能勢 信子

オーバーローンを中心として見た最近の金融情勢 大和銀行 熊本 吉郎

ケインズ経済学における供給函数について 同志社大学 岩根 達雄

尚本学からの出席者は森川太郎、安田信一両教授、高本丹、鶴嶋雪嶺両専任講師、上田昭三助手の五名であつた。

昭和三十三年九月三十日発行

関西大学學報 第三〇七號

大阪府大淀区長柄中通二丁目二番地
 編集兼 久 井 忠 雄
 発行人 久 井 忠 雄
 大阪府北区川崎町三八
 印刷所 株式会社 ナニワ印刷所
 電話(35)七二七一番

大阪府大淀区長柄中通二丁目
 発行所 関西大学學報局
 電話(35)二〇七二番
 振替大阪二六七七二番

私立大学に對する国家の補助

「わが国の学校教育の発展に多大の貢献をしてきて」、その「占める地位は極めて重要なものである」(「私学振興予算説明書」)私立学校の振興を図るための

までに、あげると、一九五三―五四大
 学年度における単科及び総合諸大学の
 經常収入に對する比率(全國平均)は左の
 通りである。

	percentage of total current income
Federal Government	13.36
State Governments	1.66
Local Governments	.13

本表は The President's Committee on Education Beyond the High School, July 1957, (U.S. Government Printing Office), P. 76 による。

私学振興予算中「私立大学研究基礎設備助成補助金」の大幅増額については、私立大学連盟にて私立大学學術研究助成対策実行委員会を組織し、文部当局と種々折衝を重ねて来たが、本年三月「私立大学の研究設備に對する国の補助に關する法律」の制定をみ、また、前年度より増額されることとなつた。

因みに、アメリカにおける私立大学に對する政府機関からの補助を、参考

私立大学の研究設備に對する国の補助に關する法律

(昭和三十三年三月三十日 法律第十八号)

(目的)

第一条 この法律は、私立大学における學術の研究を促進するため、私立大学の研究設備の購入に要する経費について、国が補助を行うこととし、もつてわが国の學術の振興に寄

与することを目的とする。

(国の補助)

第二条 国は、学校法人に對し、予算の範囲内において、政令で定めるところにより、その学校法人の設置する大学(短期大学を除く。)が行う

學術の基礎的研究に必要な機械、器具、標本、図書その他の設備の購入に要する経費の二分の一以内を補助することができる。

は、私立学校法(昭和二十四年法律第二百七十号)第五十九条第二項から第四項まで及び同条第六項の規定の適用があるものとする。

附則

(私立大学研究設備審議会への諮問)

第三条 文部大臣は、前条の規定による補助金に關し、配分の方針を定め

1 この法律は、昭和三十三年四月一日から施行する

又は交付に關する決定をするには、あらかじめ、私立大学研究設備審議

会の意見をきかなければならない。

(文部省設置法の一部改正)

(私立学校法の適用)

第四条 第二条の規定により国が学校法人に對し補助をする場合において

2 文部省設置法(昭和二十四年法律第一百四十六号)の一部を次のように改正する。

第二十七条第一項中

「學術奨励審議会 學術の奨励及び普及に關する事項を調査審議すること

「學術奨励審議会

私立大学研究設備審議会

學術の奨励及び普及に關する事項を調査審議すること。

改める。

私立大学の研究設備に對する国の補助に關する法律(昭和三十三年法律第十八号)に基き文部大臣の諮問に應じ、私立大学の研究設備の補助に關し調査審議し、及び私立大学の研究設備の補助に關する重要事項に關して文部大臣に建議すること。

に



全日本大学野球

王座を逸す

第六回全日本大学野球選手権大会は、二十三日から四日間神宮球場で本学を始め、立教大学、近畿大学、専修大学等、各地区代表校十一校参加のもとに挙行。

本学は一回戦、近畿大学と対戦、サブリマン前川投手の好投と、難波を軸にした打線の好打で五回に六点、六回に四点上げ七回コールドゲームで破り、二十五日の準決勝には東京六大学の雄、立教大学と対戦、優勝をかけての熱戦を展開、立大エース杉浦と本学前川の両投手が先発し、立大は、一回一点を先得し、三回に、高橋(立大)の本塁打で二点、五回に一点を敵じ、早やも五点のリードをゆるしたが、本学は八回疲れて来たエー

ス杉浦を梅田、原田の長短打と、難波の大会二本目の本塁打で三点をいれ二点差とせまつたが、時すでにおそく、五対三で破れ、大学野球王座の夢もくだけた。

記録(本学関係のみ) 神宮球場

八月二十四日

近大 0000 0000
056 X 110

七回コールドゲーム

八月二十五日

立大 1002 0010
0000 0000 0300 34

立 33打 1本塁打 高橋(立大) 難波
3安打 6失 2失 三塁打 梅田(関大)
二塁打 長嶋(立大)

ボクシング部

第二十七回全日本ボクシング選手権大会最終日は八月十一日高岡市古城公園特設リングで挙行され、フライ級に出場の牧選手は、順調に勝ち進んで来たが、決勝で末吉(明大)に判定で破れ、全日本アマ・ボクシング・チャンピオンを逸した。

文化会各部

休暇中の活動

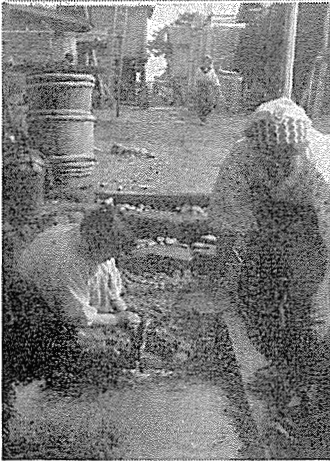
囲碁部 東京並びに名古屋遠征、第二回名古屋大学定期戦参加及び南山大学(オープン戦)東海地区優勝校等と対戦、惜しくも破れはしたが、東西両大学の親睦を深めて来た。
映画研究部 部員参拾数名の参加による合宿を行った。八月二十日より五日間信

州諏訪湖畔に於て午前は合評会、研究会午後の自由行動を通じて規律ある生活を送り、同時に部員相互の親睦を深め無事に意義深い合宿を終えた。

華道部 静岡地方にて合宿、前衛華道の造作に対する新しいイメージを与えられて今後生きかすべく努力している。

学園座 去る七月十九日より一週間、四国における「関西大学の夕」に参加。八月五日より熊本県肥後にて一週間合宿公演を開催した。なお、来る十一月二十九・三十両日、大手前会館にて秋期公演を行い、J・アマイ作「アンチゴーン」、矢代静一作「絵姿女房」の二作品を上演するが、部員一同合宿に於ける基本練習の成果を期している。

吟詩部 七月四日より七日まで、鳥取県吟詩部 大阪 出発の夜



津軽の片田舎(写真部)

東郷町にて岡山大に備え合宿練習を行い、八日岡山公民館にて岡山市市長田淵氏を迎え、関西吟詩同好会岡山支部と当関大吟詩部との交歓吟詩大会を行った。
グリーククラブ 八月二十二日から二十八日迄小豆島にて合宿並びに公演会を行い、又二十九日は高松の県公民館、三十日徳島新町小学校、三十一日高知中央公民館、九月一日松山市庁ホールでそれぞれ公演、関西大学グリーククラブの名を轟かした。

軽音楽部 県人会の招待を受け、佐賀、尾道に於て単独演奏会を催した。いずれの地方でも、その華かなうちにも、充実した演奏を聞かせ、聴衆をウツトリさせた。

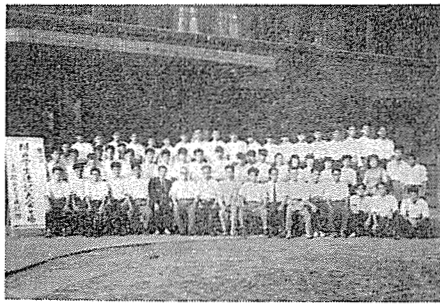
交響楽団 七月七、八両日京都、宮津地方で地元教育委員会及合唱団、教団体の協力を得て盛大に演奏会を催し、いづれも好印象を与えた。

写真部 合宿を本州の最北端津軽半島竜

飛崎にて四泊五日の予定で行った。参加者二十六名、人口密度が少なく、全員が同一の行動を取ると目立って撮影不可能な為、全員を三つのグループに分け、A組は竜飛崎で、B組は下前部落で、C組は塩越部落で、それぞれ漁村の生活を主なテーマとして撮影、これらの作品展は十二月に行う予定。

書道部 七月三日より七日の四日間高野山に於て師を招いて部全体の向上を旨として懸命練習した。

速記部 九月八日午前九時半より、関西学生速記大会を天六学舎にて行つた。折から全日本学生速記連盟結成への動きが活発化しているときでもあり、本大会の



速記大会

成果があらゆる方面から期待されていた。斯界の権威者数名の出席も得、京阪神各大学、高校速記部等の学生速記団体

より百余名参加、好成績をおさめた。

能楽部 鳥取地方にて八月九日より一週間合宿公演を行い、地元の先輩方の協力を得て高校の講堂又は能楽堂等に花を咲かせた。又各地の先輩方からの招待も有つたが色々の事情により応ずることの出来なかつたのは残念である。

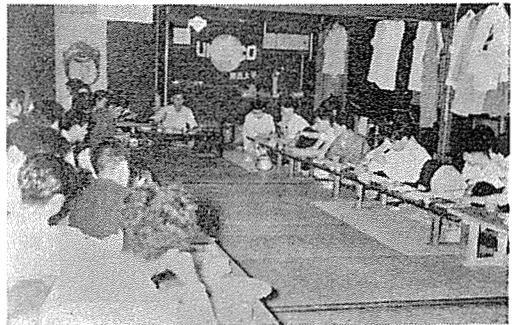
美術部 七月二十六日より月末迄行われた全日本学生美術展に二十四点出品(天王寺美術館)した。

邦楽部 小豆島大部の公民館で演奏会を開催、五〇〇名を動員して成功裡に終つた。又他村からもぜひとの招きも有つたが残念ながら応じ切れなかつた。



ユネスコ教育実習風景

ユネスコ研究部 七月三日から一週間、小豆島で実施された合宿は、教育問題を軸に展開された。活動方針の総合的研究として実態調査と併地教育が行われ、特に道徳問題を主眼に教師、青年、生徒と

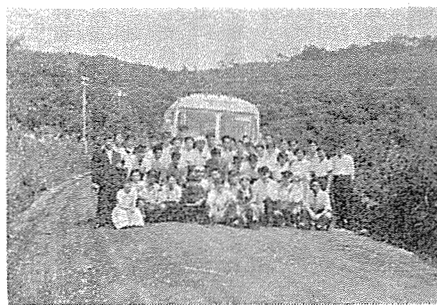


小豆島青年団との会合

各々の身近な問題を選び、広範囲に亘つて調査し、座談会等を行つて地元の人々と共に問題を討議、充分な成果を取めた。

放送部 放送研究会では第二回目の試みとして大学当局並びに富士山麓電鉄株式会社の後援を得て、去る八月二十三日より二十九日の一週間富士吉田市を中心として合宿制作を行つた。井上文学部教授を始め、会員四十三名は出発当初より雨に禍いされ、其の後の取材活動に全員濡れ鼠となる一コマもあつたが、富士山麓に点在する伝説、天然記念物、開拓村、風習、創価学会本山、自衛隊等二十数ヶ所に及ぶテーマと取組んで延々三十三時間に及ぶ録音テープに合宿成果を留め

ている。中でも富士マリモの発見者を囲んでの座談会や富士近郊の一寒村に極く最近迄間引きのあつた事実、その環境等を捕えたのは予期せぬ成果だつたといえよう。対外的活動としては富士吉田市公民館で土地の中学校のプラスバンドを加えて昼夜二部の公演を行つたが、会員の熱演する人形劇、放送劇、ポゲツトン



富士山麓の一行

ヨウは観衆の大喝采を浴び、朝日、産経他の新聞記者を迎えて関西大学の学生は大モテにモテる始末に驚く内、全員学歌斉唱の感激で公演の幕を閉じた。今後富士山麓を旅する本学の学生は、きつと土地の人から好意の籠つた目を向けられるだろうと確信をもつて高言出来るのが、何にも優る合宿土産だと思われる。



校友 バツチ

校友

校友会本部の動き

八月

今月も支部活動は活発で本部でも、発会式その他総会等に役員がつとめて出席し、広く本部並に学校事情説明等を行った。新しく発会したのは大淀、港、西の各区で、いずれも大学側、校友会側共に出席している。

又、広報部では「開大」に竣工を直前に控えた第三学会を第三面に写真特集し十五日発行した。財務部では部会で新たに会費集金人を増員し徴収に力を入れるよう方策を討議した。

七日 連絡部長会議・午後五時三十分、天六理事会議室

十五日 広報部・機関紙「開大」八月号を刊行

二十二日 部長会議・正午、青楓クラブ
二十八日 広報部会・午後六時、天六学舎一中校長室

二十九日 財務部会・午後六時、大阪郵政会館

郵政支部総会

大阪郵政支部では本年度の総会を八月十日(土)午後二時から六甲山頂「郵政

山の家」で開催。一日を楽しく過した。翌朝総会を開き伝達事項及び打合せ後、特別会員の阿部甚吉氏から開大現状談があり、石丸豊、大森俊次(校友会常議員)阿氏の挨拶、最後に井上支部長から閉会の辞があつて、二日間にわたる総会を閉じた。

出席者 阿部甚吉、石丸豊、大森俊次常議員、井上支部長 森田幹事長、山本幹事、沖名警支部長 特別会員 森岡義次郎、五十川勝、佐藤稔、汐月貞一、北村実、榎本健造 会員 榎塚正、荒木稔、渡辺和夫、山本武三郎、辻憲、服部俊一、岡斗秀昭、小倉早太郎、倉谷福夫、石橋盛夫、井上隆二郎、林田昇、北野繁太郎、前田覚尾形貞延、坂田雄臣、佐伯博道、山岡喜良、友井伊三郎、三上卓也、吉田功、小林薫、牧田基生、林志郎、杉山吉弘、岡本功、新居康祐、杉田貢、大北二郎、松井秀雄、根石野夫、岡本勝美、早川英臣、遠藤茂太、松崎次郎、江指幸四郎、亀田耕一郎、藤田政治、長岡敏行、和田啓、尾芝久雄、鈴木光慈、合田実夫、日下部茂一郎、大賀多吉

十三会

十三会では、八月十日(土)午後五時から大阪市天王寺区上之宮町「金龍閣」で懇親会を開催。当日は多忙に拘らず各地から会員がはせ参じた。

会は和やかに始まり秘芸、珍芸が続く一時間をほころばせて楽しみつづ午後十一時になり、ようやく散会した。

出席者

井上賢一、岩田卓止、畑孝二郎、新田巖、頼勇男 富山忠三、奥田正雄、加藤正次、玉置裕留男、中山幸市、中谷政男、名倉照藤、梅川喜代造、楠山秀太郎、江口透、庄司佐兵衛、久田一栄、広実郁雄、森川太郎、杉田兵作

港支部設立総会

大阪市港区では八月二十四日(土)午後五時半から大阪市港区市岡元町五丁目港区役所二階食堂で港支部設立総会を開催。大学から久井専務理事、桜田教授、本部から大月会長、金本組織副部長が出席。又隣接支部から横山栄吉大正支部長が出席した。

岡部俊吾氏が司会をつとめ、大月会長の校友会事情説明、横山栄吉氏の祝辞に続いて金本組織副部長が審議事項を説明しながら会則を逐条決定した。次いで役員選出に移つたが、支部長佐倉井茂蔵氏外役員が決定、又幹事その他は以後選任することになった。

役員の挨拶があつて議事を終え宴を開き、歓談ののち憩して桜田教授のスライド上映、外遊談を楽しみ盛會裡に発会式を閉じた。

決定役員

支部長 佐倉井茂蔵
副支部長 岡部俊吾、吉田琢一

当日出席者

小林博、田畑頼、鈴木千代松、吉井義明、増田泰久 徳本忠、真鍋貞己、佐藤寿夫、村上貴男、米田若久 中谷武司、向井英昭、中村豊秀、如康夫、長谷川博 佐倉井茂蔵、岡部俊吾、植田育宏、長谷川進、新木本崇志、藤原善三郎、渡辺辰夫、太田正義、服部清 楠隆蔵、岡正岡作。
なお支部連絡先は、港区市岡元町四丁目一 弥生館(電話57三七五) 吉田琢一の方に置くことになった。

西支部設立総会

大阪市西区では八月二十五日(日)午後六時から大阪郵政会館で西支部設立総

会を開催。大学から岩崎学長、門上組織部長、神屋敷事務長が出席した。

会は金本朝一氏の司会で始まり、大塚平夫氏が開会の挨拶、金本氏が設立経過報告を述べて議事に入ったが、議長に森寿治氏が選ばれ会則を審議、原案通り可決した。役員選出は詮衡委員六名で審議の結果支部長に札野茂次氏が決定した。

役員選出後岩崎学長が祝辞をかねて大学の近況を述べ、長柄副会長、門上組織部長から校友会の現況報告、つづいて支部からの祝電が披露されて宴を開き、最後に校友会万歳を三唱、学歌を斉唱して八時半に閉会した。

決定役員

支部長 札野茂次
副支部長 森寿治、大塚平夫
会 計 齋田薫、札野茂明
書 記 稲田公男、山本守昭
幹 事 稲石徹男、末政芳信、北川正一、中井徹 藤本秀夫、稲石保行、村上正之、中島芳彦、二見善三郎、小野坂敏、三木元治

会計監査 松岡繁晴、森川平太郎、平野繁敏
なお支部事務所は、大阪市西区九条北通二丁目六八二 札野茂次方(電話58二六番)におかれる。

天王寺支部幹事会

八月二十九日(木)天王寺区浪速荘で初の幹事会を開催、支部の運営について討議した。

出席者 藤波一治副支部長

幹事 平沢巖一、秋田友三郎、三輪祥三、東田繁一、佐々木利男、田中正春、則直幹雄、長谷川清行、奥山博之、岡本幸男

記念植樹募集

昨秋創立七十周年を記念して施設の拡充を図り、千里山及びび天六両学園に近代建築の学舎を完成し得ましたことは洵に御同慶に堪えません。

さて、この構築美に配するに樹木や芝生の景觀美を以てし、造園技術の粋をあつめて、教育環境を形成することは、日々これに接する学生達にあるいは憩いの、あるいは思索の場所を与え、学習研鑽の資となるべく、また、学窓を出でては学舎と共に、一本の樹木にも母校への思慕の情を抱かしめるであります。

かかる教育環境形成の重要性に鑑み、本学では植樹造園につとめたいと存じておりますが、また有志の方々からこの趣旨に御賛同下されて樹木の御寄附にあづかり得ば幸甚に存ずる次第であります。

昭和三十三年三月

關西大學

謹告

此度記念植樹御寄附の内、本学に於て樹木の斡旋をいたしました中で、根着不良の爲め立枯致しました分は樹木の種類に応じて適當なる季節に補償植直し致させます故御了承願います。

昭和三十三年十月十日

關西大學 校友課
營繕課

關西大學 法制史學會
關西大學經濟學會經濟史研究室 共編

大阪周邊の村落史料

A5判 フランス綴箱入

本書は關西大學図書館に所蔵されている貴重な村落史料のうち、庄屋文書といわれる庄屋の蔵に放置されていた記録を纏めて、法制史及び經濟史は勿論、一般史学やその特殊部門の研究に寄与せんとして公刊されるものである。庄屋文書のなかには、庄屋自身の任命、退役から、触、達、回状、農民の五人組、宗門改、検地、耕作、年貢、水論、新田開発は勿論、田畑建物の売買質入、奉公人、人身売買、縁組、相続、遺言、往来手形、寺送り村送り等に至るまで、百般の法律行為に関する文書までが保存されているので、近世農民の法律および社会經濟生活はこれらの史料によつて明かになるであろう。

第一輯 (庄屋文書)

二二〇頁 頒価 金四〇〇円

既刊

本輯に選んだのは訴訟に関する書類の多い河州松原村、摂州味舌、耳原兩村の庄屋留書である。

第二輯 (耕肥、拝借銀、頼母子)

一七〇頁 頒価 金三五〇円

既刊

本輯に選んだのは、農耕の基となる肥料と、その購入資金と入手方法に払つた農民の努力と法律關係、および金融、とくに御発起無尽と称せられる藩政頼母子の運営等に関する書類である。

第三輯 (証文集、村役人)

二二五頁 頒価 金四〇〇円

既刊

(なお御入用の方は大学出版部へ直接御註文下さい)

發行者 關西大學
發售所 關西大學出版部

大阪市大淀区长柄中通二丁目

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十三年九月三十日發行(毎月一回三十日發行)

關西大學學報

第三〇七號 九月號